

〈原著〉

# 乳児モデル人形を使用した清潔援助技術への実践効果 -パフォーマンス課題を使用して-

Practice effect to a clean support technology using the baby manikin  
-Using a performance problem-

畠 知華子<sup>1)</sup>, 藤岡 奈美<sup>1)</sup>

1) 活水女子大学 看護学部 看護学科

## 要旨

本研究は、乳児モデルを使用して清潔ケア演習を実習前後で行い、学生の自己評価から効果を検証することを目的とし、「効果とリスクを考慮した安全な実施ができたか」、「発達を考慮した安楽な姿勢の保持ができたか」等、6項目調査した。また、演習の効果について自由記載を依頼した。

73名に調査票を配布し、50名から回収した(回収率67.6%)有効回答は49名であった。演習は大変効果があった者22名、まあまあ効果があった者23名、あまり効果がなかった者4名であった。パフォーマンス課題の自己評価は、全ての項目で得点が上昇した。特に、「患児のニーズに沿う援助」について、実習後の得点が高く効果を認めた( $p < 0.001$ )。自由記載から66のコードが抽出され、『実践的効果の自覚』は、最多の31コードであった。

したがって、実践モデルおよびパフォーマンス課題を使用した実習前演習は、学修効果を高めるために有効な演習である事が窺えた。

キーワード：乳児モデル パフォーマンス課題 演習 小児看護学実習

## I. 緒言

日本では核家族化、少子化等の社会背景を受け、学部生には乳幼児とその母親を身近に感じることのない生活体験があり、乳幼児との接触体験は非常に少ない現状にある(末永, 2012、野村ら, 2007)。そのため、学部生のレディネスを理解し教育していく必要がある。しかし、以前と比べてカリキュラム改正により、臨地実習時間は大幅に減少した。昭和26年では、3927時間で昭和42年は1770時間、更に平成8年では1035時間と減少しており(公益社団法人日本看護協会, 2010)、実技などの実践力を身に付ける機会は減少している。また、母性・小児看護において、乳幼児の成長・発達など対象

理解に基づく支援が求められる中、身体能力・情緒・社会性の発達の特徴を捉えた児へのアプローチと関係性の構築が困難な傾向にある(鈴木ら, 2017、高橋ら, 2012)。そこで実践力を身に付けるため、日本看護系大学協議会における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」によると、実習によって学生がどこまで目標を達成できたか、どんな成果が得られたかを常に評価し、改善に繋げていく仕組みを構築することが必要であると提言されている。さらに、教員は常に自らの指導を振り返り、学生の目標達成を支援するために最善の努力をすることが必須であるとされ(日本看護系大学協議会, 2018)、先行研究におい

ても清潔ケアに関する視聴覚教材を作成し、学修意欲を向上させ、小児とのコミュニケーションについても意欲を持たせる事ができたと報告されていた（桶本，2014）。

そこで、本研究は、実習前後に患児に類似したモデル人形とパフォーマンス課題設定を行い、清潔ケアの演習において学生が主体的に考え実施できるようにし、乳児モデル人形を使用した清潔援助技術への実践効果を検証した。

## II. 研究方法

### 1. 対象者

A看護大学看護学部で母性看護学概論、小児看護学概論、母性看護学方法論・演習、小児看護学方法論・演習を履修した学生であり、2019年度小児看護学実習生73名とした。

### 2. 調査方法

本調査は小児看護学実習直前、直後の2回実施した。本研究の趣旨を口頭で説明し、同意が得られた対象者に演習室で調査票を配付し、乳児モデルを使用し陰部洗浄・臀部浴の清潔ケア演習実施後に記載を依頼した。調査票への回答は約15分を要する内容とした。

小児看護学実習は、7名～8名の学生で構成されグループで実施している。実習は、10クールあり、それぞれのグループの小児看護学実習前・小児看護学実習後に清潔ケアの演習を実施した。演習では、パフォーマンス課題を設定した。パフォーマンス課題は以下の2事例を提示した。

表1にパフォーマンス課題の事例を示す。

表1. パフォーマンス課題

事例1	生後26日	男児	RSウイルス感染症で5日前から入院している。下痢が数日続いている。臀部の発赤を確認した。既往歴なし。
事例2	7ヵ月	女児	同上

### 3. 調査項目

調査項目は、基本属性3項目（年齢 きょうだいの有無及びきょうだいの年齢）、乳幼児接触経験について2項目（乳幼児との遊び経験の有無と当時の年齢）、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目（①効果とリスクを考慮した安全な実施、②不安を軽減しながらの実施、③発達を考慮した安楽な姿勢の保持、④刺激を最小限とした洗浄、⑤フィジカルアセスメント（FA）に基づく清潔ケアニーズ、⑥児のニーズに沿ったケアの実施）とした。なお、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目は小児看護学実習前後に4段階のリッカート法（よくできた まあまあできた あまりできなかった 全くできなかった）にて調査した。

小児看護学実習後の調査には、自由記載を設定し、事前に実践した乳児モデルでの陰部洗浄・臀部浴（以下、清潔ケアと記述する）の演習の効果と必要性について記載を依頼した。

### 4. 調査期間

2019年10月1日～2020年3月31日

### 5. 分析方法

基本的属性は、記述統計量を算出し、対象の概要を把握した。さらに、小児看護学実習前後の演習について、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目を比較するために Wilcoxon signed rank test を実施した。また、遊びの経験の有無、1年以内に遊んだ経験の有無、末子との年齢差が6歳以上の有無について実習前の演習で安全・安心、安楽、ニーズについて6項目を比較するために Mann-Whitney U test を実施した。

なお、統計ソフトはSPSSver25を使用し、有意水準を5%以下とした。

自由記載から得た質的データは、コード化し、意味の類似性に基づいて共同研究者2名で内容を分析した。

## 6. 倫理的配慮

研究者は、文部科学省が告示する「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」(2017年3月8日改訂)に従って本研究を実施した。また、本研究は、本学設置の倫理委員会で承認後に実施した(承認番号19-008号)。対象者へは、倫理委員会で承認の得られた「本研究に関する説明文書」を使用し、研究の目的、プライバシーの厳守、個人情報保護等々について口頭及び書面で説明した。

## III. 結果

### 1. 対象者の背景

A大学看護学部で、小児看護学概論、小児看護学方法論・演習を履修した73名に調査票を配布し、50名から回収した(回収率67.6%)。このうち、無効回答1名を除外した49名を本研究対象者とした。対象者の背景を表2に示す。

年齢：平均±標準偏差	20.6±0.5
末子との年齢差	2~11歳
きょうだいの人数(n%)	
なし	3(6)
1人	25(51)
2人	17(35)
3人	3(6)
4人	1(2)
乳幼児との遊び経験人数(n%)	41(83.6)
経験年齢：平均±標準偏差	16.1±5.5
1年以内に遊んだ経験人数(n%)	23(46.9)

対象者の平均年齢は、20.6±0.5歳であった。きょうだいがいると回答した者は46名(94.0%)であった。きょうだい人数は1人が最も多く25名(51%)であり、2人が17名(35%)、0人は3名(6%)、3人は3名(6%)、4人は1名(2%)であった。末子との年齢差は2-11歳までであった。

乳幼児との遊びの経験を41名(83.6%)が有し、8名(16.3%)は、経験がなかった。乳幼児と遊んだ経験の平均年齢が16.1±5.5歳であったが、1年以内に遊んだ経験があると回答した者は、23名(46.9%)と半数以下であった。

### 2. 実習前後の演習によるパフォーマンス課題の効果

実習前後において、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目を調査した結果を表3に示した。「①効果とリスクを考慮した安全な実施」は、実習前平均得点が3.0±0.6点から実習後3.3±0.6点に上昇した(p<0.01)。「②不安を軽減しながらの実施」は、得点が実習前2.6±0.8点から実習後3.2±0.7点となった(p<0.001)。「③発達を考慮した安楽な姿勢の保持」は実習前得点が2.8±0.7点から実習後3.3±0.6点となった(p<0.001)。「④刺激を最小限とした洗浄」は、実習前得点が3.0±0.6点から実習後3.4±0.5点と上昇した(p<0.001)。

「⑤フィジカルアセスメントに基づく清潔ケアニーズ」は、実習前得点が2.8±0.7点から実習後3.3±0.5点と上昇した(p<0.001)。

「⑥児のニーズに沿ったケアの実施」は、実習前は得点が2.7±0.7点から実習後3.3±0.5点と上昇した(p<0.001)。いずれの項目も実習前より実習後が得点は上昇した。

遊びの経験が有る者41名、遊びの経験が無い者8名の実習前の清潔ケア演習の安全・安心、安楽、ニーズについて6項目得点を比較した結果、有意差を認めず、遊び経験による差は

表3. パフォーマンス課題の効果

パフォーマンス課題		実習前	実習後	
安全・安心	①効果とリスクを考慮した安全な実施	3.0±0.6	3.3±0.6	**
	②不安を軽減しながらの実施	2.6±0.8	3.2±0.7	***
安楽	③発達を考慮した安楽な姿勢の保持	2.8±0.7	3.3±0.6	***
	④刺激を最小限とした洗浄	3.0±0.6	3.4±0.5	***
ニーズ	⑤フィジカルアセスメントに基づく清潔ケアニーズ	2.8±0.7	3.3±0.5	***
	⑥小児のニーズに沿ったケアの実施	2.7±0.7	3.3±0.5	***

Mann-Whitney U test : P<0.01\*\* P<0.001\*\*\*

無かった。実習後の清潔ケアの清潔ケア演習の安全・安心、安楽、ニーズについて6項目得点を比較した結果も実習前と同様に有意差を認めず、遊び経験による差は無かった。また、1年以内に遊びの経験が有る者23名、1年以内に遊び経験が無い者26名の実習前の清潔ケア演習の効果の安全・安心、安楽、ニーズについて6項目得点を比較した結果、有意差を認めず、1年以内の遊び経験による差も無かった。実習後の清潔ケア演習の効果の安全・安心、安楽、ニーズについて6項目得点を比較した結果も実習前と同様に有意差を認めず、1年以内の遊び経験による差も無かった。

末子との年齢差が6歳以上有る者10名と年齢差が6歳以上無い者39名との実習前の清潔ケアの演習の効果の差をみたところ、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目のうち、安楽の視点である「③身体的発達の特徴を考慮した姿勢を保持させることができた」の1項目について、年齢差が6歳以上ある者の方が(3.2±0.4点)6歳離れていない者(2.7±0.7点)よりも、得点が有意に高かった(p<0.05 p=0.02)。実習後の清潔ケアの演習の効果の差をみたところ、安全・安心、安楽、ニーズについて6項目の清潔ケアの効果の差はなかった。

乳児モデルでの清潔ケア演習の効果について、大変効果があった者22名(45%)、まあまあ効果あった者23名(47%)、あまり効果なかった者4名(8%)であり、まったく効果ないと答えた者はいなかった。あまり効果が無

いと回答した4名は「実習中に乳児を受け持つことがなかった」、「清潔ケアをする機会がなかったため」と記載されていた。

パフォーマンス課題の実施について、今後も実施を希望した者は49名(100%)すべての学生が演習を実施した方がよいと回答した。

### 3. 安全・安心、安楽、ニーズに分類される事前演習効果

自由記載を、コード化し、安全・安心、安楽、およびニーズに分類されるカテゴリを生成した結果を表4に示す。なお、抽出したコードを「」、カテゴリを【】とし、()にコード数を記載した。

安全・安心について抽出されたのは57コードであった。分類されたカテゴリ、およびコードの詳細は、「演習を生かして実施できた(10)」、「患児への実践の効果を実感(6)」、「ケア時の留意点への理解(5)」等のコードから【実践的效果の自覚(31)】が生成された。「手順がわかったうえでの実施ができた(5)」、「迷うことのない手順への理解(5)」、「清潔ケアを工夫しながら実施できた(3)」等のコードから【演習を活用した工夫を実践(20)】が生成された。「演習で自身が気を付けた部分を着目した見学(3)」、「手技を確実に身に付けたいという思い(1)」等のコードから【意識的な見学への効果(6)】が生成された。

安楽について述べられているのは全部で4コードであった。安楽に分類されたカテゴリ

表4. 安全・安心、安楽、ニーズに分類される事前演習の効果

カテゴリー	コード (コード数)	
安全・安心	「演習を活かして実施できた」 (10)	
	「患児への実践への効果を実感」 (6)	
	「ケア時の留意点への理解」 (5)	
	「頭づくりをしてからの実施できた」 (2)	
	「工夫が必要だとわかった」 (2)	
	【実践的効果の自覚】 (31)	「呼吸状態を観察しながら実施できた」 (1)
	「忘れていた手技を想起できた」 (1)	
	「清潔不潔を意識したケアができた」 (1)	
	「オムツ交換の実施ができた」 (1)	
	「暴れる児への対応の難しさ」 (1)	
	「声掛けのしやすさ」 (1)	
	「手順がわかったうえでの実施できた」 (5)	
	「迷うことのない手順への理解」 (3)	
【演習を活用した工夫を実践】 (20)	「清潔ケアを工夫しながら実施できた」 (3)	
	「必要物品や手順の理解」 (3)	
	「根拠に基づき清潔ケアを実施できた」 (2)	
	「ケア一連の流れへの理解」 (2)	
	「ケア実施時の胎位の工夫ができた」 (1)	
	「男児のモデル人形からの学びを活用」 (1)	
【意識的な見学への効果】 (6)	「演習で自身が気を付けた部分を着目した見学」 (3)	
	「手技を確実に身に着けたという思い」 (1)	
	「乳児の衣類を濡らさない工夫に着目した見学」 (1)	
安楽	「看護師の実践から課題に着目した見学ができた」 (1)	
	「泣いている児への落ち着いた対応ができた」 (1)	
	「あせらず実施できた」 (1)	
	「身体的負担を軽減した清潔ケアが実施できた」 (1)	
	「4歳児のセルフケア能力を活用し実施ができた」 (1)	
ニーズ	【演習を活用した安楽なケア】 (4)	
	【演習によるニーズへの効果的対応】 (5)	「患児をアセスメントし実践できた」 (2)
	「患児のニーズに応える対応ができた」 (2)	
「清潔ケアが患児のニーズを満たせた」 (1)		

およびコードの詳細は、「泣いている児へ落ち着いた対応ができた (1)」、「あせらず実施できた (1)」、「身体的負担を軽減した清潔ケアが実施できた (1)」等のコードから【演習を活用した安楽なケア (4)】が生成された。

ニーズについて「患児をアセスメントし実践できた (2)」、「患児のニーズに応える対応ができた (2)」等のコードから【演習によるニーズへの効果的対応 (5)】が生成された。

#### IV. 考察

##### 1. 対象者の乳幼児接触経験の希薄を補う小児看護技術への導入の必要性

本研究対象者の大半にきょうだいがおり、乳幼児との遊び経験は約 8 割が有している事が判明した。その中でも 1 年以内に遊んだ経験が

ある者が 46.9%であった。日本における核家族が占める割合は、平成 30 年国民生活基礎調査によると 1986 年の三世代の世帯数の割合は 15.3%で 2018 年は、5.3%であった。児童のいる世帯は、22.1%であると報告され、1986 年の児童のいる世帯 46.3%からすると半数である。また、きょうだいの数も減少しており、児童が 2 人いる世帯が 1986 年は 22.3%であったのに対し、2018 年は 8.9%であった。合計特殊出生率は 1.36 であった (2019)。つまり、きょうだい少なく、他世代に渡って寝食を共にしている生活背景はほとんどが有していないことが推測できる。しかし、対象者は 2 人に 1 人は乳幼児との遊び経験を持っていた。また、1 年以内に遊んだ経験があると回答した者は、23 名 (46.9%) と半数近くいたことから、看護大

学生になってからも、乳幼児との遊び経験を有していたことがわかった。先行研究では、看護学生の子どもの接触体験の内容は、小学生までの子どものあそび相手、赤ちゃんを抱くなどの行動が殆どであり、長時間の世話と清潔に関する項目は少なかったと述べている（野村，2007）。本研究の対象者も遊び経験はあるが、遊ぶ子どもが、きょうだい以外になると日常生活の世話として清潔ケアを実施することは少ないと考えられた。そのため、表面的な関わり限定していると推測され、本研究対象者における乳幼児との遊びの経験の有無は、清潔ケアの演習効果に影響しなかったと考えられた。しかし、きょうだいが6歳以上年の差がある者と6歳以上の年の差がないものとは、「③身体的発達の特徴を考慮した姿勢を保持させることができた」の1項目について得点に有意な差があった。これは、家庭内で末子との普段の関わりから得た技術や能力である事も推測された。小児看護が対象とする小児とは、基本的な生活行動を周囲の大人が世話することが求められるため、日常生活援助を実践することは重要である。そのため、6歳以上離れたきょうだいがいることは、日常生活援助を実施するにあたり、経験があるため有利なこともあると考えられる。しかしながら、昨今、未熟児医療の発展に伴い、未熟児や先天性疾患を抱えて生まれてくる小児も多く、身体的な特徴などから、清潔ケアの難しさもある。そのような小児への清潔ケアは、健常児と比べ、より丁寧な日常生活援助を必要とされる。6歳以上年の差があるきょうだいがおり、日常生活援助を実施したことがあることと、入院を要する小児への清潔ケアへの能力との関連性は、少ないと推測される。

## 2) 安心・安全、安楽、ニーズの視点から評価する清潔ケア演習の実践効果

小児看護技術演習に関する研究の動向によると、“教授方法や教材活用による成果”、“実

習前演習の成果”、“卒業前演習の成果”など、実践効果を研究しているものが多くあった（長谷川，2014）。また、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」では、実践能力を育成するためには講義と実習は実践と思考を連動させながら学ぶことが効果的で、技術演習での思考を実習場面へつなぎ、実習での実践を内省することが重要である（厚生労働省，2011）とされている。本研究では、安心・安全、安楽、ニーズの視点から清潔ケアの演習効果を考察した。

清潔ケア演習による実践効果を評価した結果、全ての項目において、得点が増加しその効果を認めた。また、実習後にも乳児モデル人形で清潔ケアを実施し、自己評価することで実習中の清潔ケアについて振り返ることができていた。

### 2) -1 清潔ケアの安心・安全について

小児看護の臨床場面では、常に子どもの安全を保障する（小児看護学会，2010）とあるように、本研究では清潔ケアの安心・安全に着目した。小児への清潔ケアにおける安心・安全は、効果とリスクを考慮した安全な実施、不安を軽減しながらの実施について調査し、乳幼児モデル人形を用いた演習によって、その効果を認めた。本研究対象者の清潔ケアにおける安心・安全への自己評価は、演習をおこない、実習において実践することで高くなった。先行研究では、診療援助方法論受講した看護学生は、安全な看護とは、正確な知識と技術の提供が必要であるという認識を持っていた（平井ら，2018）。本研究でも清潔ケアの効果についての自由記載から「手順がわかったうえでの実施ができた」、「迷うことのない手順への理解」、「清潔ケアを工夫しながら実施できた」とあり、技術の正確な知識を修得した上、安心・安全に留意して演習での学びを活用し、実習で実践できていたと推測された。その他の先行研究では、看護学生

が小児の清潔援助を実施する際、小児の安全を守るために乳児の身体的特徴からの安全や小児看護師としての安全行動について意識していたことが分かっている（鈴木，2013）。よって、本件研究からも安心・安全についてコードが多く抽出（57コード）されたため、演習・実習を通して安全・安心について十分な認識を得られやすい結果となったと考えられた。

## 2) -2 清潔ケアの安楽について

小児への清潔ケアにおける安楽は、定頸などの発達を考慮した安楽な姿勢の保持、成人に比べて脆弱な皮膚の構造などの特徴を理解したうえで陰部を洗う、また、刺激を最小限に実施することについて調査し、乳幼児モデル人形を用いた演習によって、その効果を認めた。先行研究では、小児看護学実習では、短期間の受け持ちであるため患児の状態を把握して計画立案できない。そのため、技術不足により安全安楽に援助できていないと述べられていた（二宮，2013）。本研究では、安楽についてのコードは「泣いている児へ落ち着いた対応ができた」、「あせらず実施できた」、「身体的負担を軽減した清潔ケアが実施できた」、「4歳児のセルフケア能力を活用した実施ができた」の4コードが抽出され、コード数は少ないが、児の定頸の有無によって安楽な姿勢を選択している行動も見られていたこともあり、清潔ケアのパフォーマンス課題の効果について示唆されたと考える。体位変換を実施する際に、乳児モデルの首を支え、体幹を支えながら実施する行動も見られた。しかし、乳児モデルでは皮膚の脆弱さについてイメージが持てず、刺激を最小限に陰部洗浄を実施していたかどうかは定かではない。また、学生の自由記載からは明確になっておらず、皮膚の脆弱さに配慮できるように、教員の発問などの必要性を感じ、教授する際の留意点として今後検討の必要性があると考えられた。三つ目に清潔ケアのニーズについて述べる。

小児への清潔ケアにおけるニーズは、フィジカルアセスメントに基づく清潔ケアニーズ、児のニーズに沿ったケアの実施について調査し、乳幼児モデル人形を用いた演習によって、その効果を認めた。先行研究においても同様に、小児看護技術の特徴や子どものイメージ化につながる状況設定を行うことで、学生の演習での学びの評価を高め、確かな知識と子どもに合わせた技術の必要性を学び、広い視野で観察を行いながら、子どもを尊重した関わりを行うことの重要性についての学びがあった事が報告されている（柴崎，2016）。本研究対象者は、さらに、「患児をアセスメントし、実践できた」、「患児のニーズに応える事ができた」等個別性にも配慮をするという効果を得た。パフォーマンス課題は、意図的に清潔ケアの留意する視点を明確にさせることができる。そのため、技術を習得する者にとって目標が明確になったと考える。

松澤ら（2017）の文献レビューによると小児看護学シミュレーション教育について、発達段階を強調したシナリオと高性能シミュレータを用いた演習では、ブリーフィング・デブリーフィングの必要性が述べられていた。実習前のパフォーマンス課題を自己評価することは思考の生理や根拠の確認になっており、ブリーフィングを実施できていたと考える。また、実習後演習の自己評価も自身の行動を通して個人の課題を解決していけるとし、デブリーフィングを実施できたと考える。教員が対象者に学んでほしいと思う視点を明確にし、パフォーマンス課題として自己評価させることは、指導したい内容を学生に着目させやすく、何を技術演習から学べばよいのか明確に理解しやすいと考える。今後も演習や実習での実践力の強化が課題となる。しかし、先行研究には、小児看護学実習での看護技術について、見学も含め経験率が減少3割に満たなかった項目が多数ある（長谷川，2016）ことから、今後も技術演習の内容

を検討し、充実させる必要がある。演習の限界として体動や反応がないモデル人形では、患児のニーズに沿ってケアすることの限界があり、実習中に患児の体動や啼泣などに清潔ケアのやりにくさを感じていたことも自由記載の「暴れる児への対応の難しさ」から伺え、また、小児の皮膚の脆弱さのイメージが持てないことから、さらなる演習の工夫が必要になると思われる。

## V. 結論

本研究結果から、乳児モデル人形を使用した清潔援助技術への実践効果は、安全・安心、安楽、ニーズの視点から評価した結果、全てにおいて効果を認めた。また、パフォーマンス課題を使用した事で、「実践的效果を自覚」というカテゴリーを生成し、構成されたコードが最も多く抽出された。しかしながら、乳幼児モデルにおける活動性への対応は修得できておらず、実践で強化する内容も判明した。

本論文内容に関連する利益相反はない。

## 研究の限界と今後の課題

本研究は、実習中または実習後の演習のどの時期で、効果を認めたかその詳細を明らかにしておらず、研究の限界であった。

## 引用参考文献

長谷川由香、三宅靖子、串橋裕子 (2014) : 看護基礎教育課程における小児看護技術演習に関する研究の動向—2001年～2010年に発表された文献の分析—、日本小児看護学会誌、23 (1)、36-43

長谷川 由香、齋藤 啓子(2016) : 小児看護学実習におけるケア経験向上を目指した学内演習・実習指導の効果、日本看護学教育学会誌、26 (1)、89-96.

平井 由佳、川瀬 淑子、岡安 誠子 (2018) : 診療援助方法論受講前後にみる看護学生の

“安全な看護”に対する認識の変化～テキストマイニングによる計量的分析～、島根県立大学出雲キャンパス、14、29-35.

布施晴美、古谷佳由理、服部満生子 (2001) : 小児看護臨床実習に向けての小児看護技術教育のあり方、埼玉県立大学短期大学部紀要、3、41-49.

厚生労働省 (2014) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書、<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000013l0qatt/2r98520000013l4m.pdf> (参照2020-8-2).

松井由美子 (2010) : 小児看護学教育における技術演習の効果、新潟医療福祉学会誌、9 (2)、31-38.

二宮 恵美(2013) : 小児看護学実習における看護学生の清潔援助での困難感、小児看護、43、161-164.

西岡加名恵 (2016) : 教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか、図書文化社.

野口明美、佐野明美、服部淳子 (2014) : 小児看護技術教育の効果的な演習プログラムの検討—バイタルサイン測定場面のイメージ化をはかる—、日本小児看護学会誌、16 (2)、24-35.

野村幸子、河上智香、長谷典子 (2007) : 子どもの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ、人間と科学、県立広島大学保健福祉学部誌、7(1)、169-180.

桶本千史、林佳奈子、長谷川ともみ (2014) : 乳幼児の清潔ケアに関する視聴覚教材の制作とその評価 - 実習経験有無による比較 -、富山大学看護学会誌、14(2)、173-180.

柴崎由佳、二宮恵美 (2016) : 小児看護技術演習における学生の学び、看護教育研究学会誌、8(2)、27-34.

末永香、中山静和 (2012) : 看護学性が持つ子どものイメージとそれらに関連する要因、城



西国際大学紀要、21(1)、28-39.

鈴木桂子、吉原有佳理 (2017) : 子どもの発達段階を理解する小児看護学時演習における学生の学び、日本看護学会論文集 (ヘルスプロモーション)、47、35-38.

鈴木 真美、小柳 麗子(2013) : 臨床看護実習で看護学生が小児の清潔援助を実施する際の安全意識、小児看護、36 (2)、245-250.

高橋由美子 (2012) : 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセス、日本看護科学会誌、32 (3)、35-44.

Practice effect to a clean support technology using the baby manikin  
-Using a performance problem-

**Abstract**

The purpose of this study was to examine the effectiveness of the cleanliness care exercise using the infant model before and after the exercise, and to verify the effectiveness of the exercise from students' self-evaluation, and to investigate six items, including whether the exercise was safe to implement considering the effects and risks, and whether the students were able to maintain a comfortable posture considering their development. They were also asked to freely describe the effectiveness of the exercise.

As a result, the response rate was 67.6%, and there were 49 valid responses. Twenty-two participants found the exercise to be very effective, 23 participants found it to be reasonably useful, and 4 participants found it to be not so useful. Self-ratings of the performance tasks showed an increase in scores on all items. In particular, the post-practicum scores for "Helping to meet the needs of the affected children" were high and effective ( $p < 0.001$ ). Sixty-six codes were extracted from the free entries, with 'awareness of practical effectiveness' being the highest number of codes (31).

Therefore, the pre-training exercise using the practical model and the performance task was seen to be an effective exercise to increase the learning effect.

Keywords: infant model, performance task, exercise, pediatric nursing practice